

「奥州白石女敵討」とその社会的受容

牧田 勲

——庶民の中の敵討——

一 はじめに

近世の敵討は、封建倫理の中核である忠孝道徳や「不倶戴天」思想に支えられ、武士道とも密接に結びついた自力救済行為であった。確かに近世中期まで、敵討は武士階級に特有の慣習であったといえるが、中期以降になると庶民の敵討が目立ってふえてくる。⁽¹⁾と同時に、庶民が敵討情報や敵討話を娯楽として愛好する傾向もいちだんと顕著になる。こうした変化については、どのように考えたらよいのであろうか。それについては、さしあたり二つの事情が考えられよう。

第一は、領主の民衆教化の影響である。敵討を實行した庶民は、寛政期の『孝義録』に見られるように、しばしば領主から「孝子」として褒彰されており、これは敵討が「孝の実現」として捉えられ、それをなした者は封建倫理の理想的な実行者として評価されたことを示すものである。庶民が「孝」にとらわれて、敵討を實行し、敵討話を愛好したとすれば、それはとりもなおさず、中期以降における封建倫理の大衆的受容を意味するものだろう。

第二は、近世後期における町人文化の爛熟、「大衆社会」状況の出現である。建前としての封建倫理や領主層の思惑と

キーワード：敵討 孝 儒教 ユートピア 宮城野信夫顕彰運動

は別に、庶民にとつての敵討は、日常の退屈や憂さを晴らしてくれる恰好の話題であり、心躍らせる興味深々の出来事であったといつてよい。庶民の間では、敵討に関する真偽不明の様々な噂や風聞が飛び交い、瓦版、見聞記、小説が読まれ、さらには芝居として、敵討話が楽しまれていたのである。近世の半ば以降敵討は、庶民にとつてたいへん身近な文化でありつづけた。⁽²⁾

このように民衆は、敵討の実践者であり、敵討情報や敵討話の熱心な伝達者・享受者であり、そしてときに創作者でもあった。この意味において、敵討に関する情報や創作物は、近世の庶民文化の重要な一部をなしているものであり、そこには当時の庶民の欲求や思いがさまざまに反映されているといわねばならない。

近世には実説、虚説、あるいは真偽不明の敵討話が数多く存在したが、実はそれ自体のうちにしばしば前記のような二要素、すなわち「孝」道徳を称揚する一方で、庶民受けのする著しい娯楽性を同居させるのである。今日の目からみて、両者は矛盾するように思われるのであるが、実際のところ庶民は、そうした敵討話をどのように読み、理解し、受容していたのだろうか。近世の敵討話を読んでいるうちに、こうしたことに疑問をもつに至り、取り組んでみたのが本稿である。敵討話を通して窺われる、敵討についての庶民の思い、敵討の実行者への眼差し、それらの時代的変化について、幾ばくかでも明らかにできれば幸いである。

なお、そのためにとくに「奥州白石女敵討」⁽³⁾を事例として取り上げる。これは宮城野・信夫の百姓姉妹による敵討であり、読本や演劇を通じて近世の庶民に広く知られていた敵討話であった。

二 実録本『奥州白石女敵討』

(一) 敵討話の二要素

奥州仙台領であったとされる姉妹敵討については、実録本『奥州白石女敵討』のほか、『月堂見聞集』の記事、『半日閑話』に所載された仙台藩士の書状、白石地方の伝承など、断片的な記録が残されているに過ぎない。だが、これらの記事はすべて史実を伝える確実な史料といえるか疑わしい。史料の伝来に確たるものはなく、記載された内容もそれぞれ異なっているばかりか、史実に反する明らかな虚構が多々存在する。さしたる検証もない史実説が通説として広がっているが、私はこの敵討話自体虚構と考えている。ただし、虚実の点についてはすでに論じたことがあるので、ここではこれ以上立ち入らない。⁽⁴⁾

こうした記録のなかで、近世の人々にもっとも親しまれ、よく読まれたのは、疑いもなく実録本『奥州白石女敵討』⁽⁵⁾であり、それを取り込んだ、これも実録本の『慶安太平記』であった。巷間に知られる「白石女敵討」の話は、この実録本のストーリーなのである。実録本とは、近世中期以降、講釈師の語りが世間の評判を取った結果、その語りを忠実に筆に起こしてまとめられた書物のことをいう。つまり「見てきたような嘘」を壮大に描いた小説が実録本なのである。その写本が広く出回り読まれた結果、宮城野・信夫の姉妹敵討が評判となって『碁太平記白石噺』という歌舞伎に仕立てられ、次いでその名場面が浮世絵となり、さらには民俗芸能となって全国各地に伝えられることになったのである。

このようなわけで「白石女敵討」は、近世後期の庶民にとってたいへん馴染み深い敵討話であった。多くの庶民は、この話の真偽をせんさくすることなどせず、ただただ話の面白さを堪能してきたのである。

まず、その筋をざっと紹介しておこう。

寛永一三年（一六三六）、仙台藩白石城主片倉小十郎の領内逆土村に与太郎という百姓がいた。ある日、与太郎が二人の娘（一六歳と一三歳）と田の草取りをしていると、片倉配下の無頼の侍志賀团七が通りかかる。たまたま娘の投げた草が团七にあたり、与太郎・娘ともに詫びるが、团七は聞き入れず無惨にも与太郎を切り殺してしまふ。姉妹は仰天して家に逃げ帰り、母に事の次第をうちあけるが、母もシヨックで亡くなってしまふ。嘆き悲しみ、途方にくれた姉妹は、いったん母の故郷の相馬に身を寄せるが、やがて父の敵を討つことを心に誓い、剣術を習うために江戸に出る。

人々から江戸一番の兵法家が由井正雪であると聞いた姉妹は、正雪の道場に住み込み、密かに剣術の稽古をしていたが、それを見た正雪が質したところ、涙ながらに父の無念と敵討の志を語りはじめた。姉妹の孝心に感じ入った正雪は、剣術修行を約束し、姉に宮城野、妹に信夫と名づけ、姉には鎖鎌と手裏剣、妹には長刀を教えるとともに、妻に命じて礼儀作法も教え込んだ。五年もすると姉妹の腕は、めきめき上達し、器量立居振舞いも見違えるように立派になった。そこで正雪は本望を遂げることを許し、見届けの門人をつけて奥州へと旅立たせたのである。

仙台公に言上すると、公も姉妹の孝心と正雪の義心に感心して、江戸表の公許を得たうえで果し合いを命じられた。こうして白石の川原で、藩役人立会いの上で姉妹と团七の対決が行われることになったのである。結局团七は、宮城野の手裏剣で目をつぶされ、鎖鎌に腕をからまれたところを信夫の長刀で腕を斬られ、宮城野の鎌で首を打ち落とされた。本懐を遂げた姉妹は、やがて駿府の尼寺に移り住み、その後正雪が謀叛で落命するとひたすら正雪の供養をして平穩な余生を送ることになる。

この姉妹敵討は、奥州と江戸を舞台とする壮大な物語であり、由井正雪という著名人が登場することも人気の一因であろう。しかし、何よりも年若いヒロイン姉妹への同情、加害者团七への怒り、そして復讐のカタルシスという物語の構造が、庶民の人気を得た最大の理由ではないかと思われる。とはいえ、実録本の表面的記述では姉妹の「孝心」と正雪の「義心」が強調される話となっているのである。

この敵討話にたいするこのような受け止め方のズレは、すでに近世からあるのであり、例えば静岡地方に伝わる「白石

和讚⁽⁶⁾は、

「ちちをうたれし かなしきは たとへんかたも なきくらし かたきをうちて なきちちの めいどのまよひは
らさんと いとどあはれを みちのくの こきやうをいづる しのおずり おやこのえんも うすもやう」
と同情をよせつつも、

「花のお江戸の かぐらざか 油井の正雪 しもやしき かりそめならぬ みやづかへ 忠と孝との ふたみちを
ふたりのこころ ひとすぢに かたきをねらふ 一ねん(念)に 剣術けいこの 日をかさね としをかさねて い
つのまに みとせよとせの こう(孝)をつみ」

と、「孝」の物語として語っている。情念の同情が和讚全体に漂っているが、「孝」からは逃れられないのである。とはい
え、和讚は「孝」そのものを主題とするのではなく、尼となり、正雪の回向に過ごした姉妹の一生を語ることに要諦があ
る。

これにたいして、歌舞伎のストーリーを踏まえた「ちよぼくれ白石敵討⁽⁷⁾」では、「孝」という倫理的表現はなく、

「につっき大七(実録本では加害者は志賀団七であるが、歌舞伎では志賀台七になっている)せうをおもくし つみをかる
くし たみ百姓を いたはるべきに がいふるまい こんごどうだん」

「かたき大七 どこにあるとも たづねいだして おつとのかたき 親のかたきなのりあわせて ほんもうたつせん
ものをと こころやだけに おもふねんりぎ おのれそのまま おくべきものかと」

「二人の娘が かよはきこぶしに うらみの ねんりき いわほを とふして」

などと、直接的な感情が吹き出している。儒教による後知恵的説明がない分、庶民の思い入れが伝わってこよう。こうし
た「ちよぼくれ」に見られるような素朴な加害者への怒り、被害者への同情、報復の快哉こそが、近世庶民にとっての本
音であり、情緒のままに受けとめられた「白石話」だったのではないか、と私には思えるのである。

実は、後に見るように、「白石女敵討」をめぐる言説は、近代になってから、とりわけ大正期以降いっそう「孝」一色

になっていく。この敵討話に触れた記述は、それを「孝」の物語として理解するだけでなく、姉妹を「孝子の鑑」、「婦道の亀鑑」とまで称揚するようになるのである。

だが、近世の庶民にとつての「白石話」は、たとえそこに「孝」のヴェールが掛かっていたとしても、怒りや同情という、より直接的で人間的な感情に結びついたものだったと思われるのである。

(二) 価値転倒のユートピア

明治以降の「孝」一辺倒の理解が続くなかであつて、この姉妹敵討を「孝」の物語としてではなく、まったく異なる解釈を見いだしたのは、七〇年代に『奥州白石断』の成立と展開」という論文を発表された茶谷十六氏であつた。⁽⁹⁾氏は、百姓一揆の訴状類といっしょに「白石女敵討」の写本が出てきた例や、南部三閉伊百姓一揆の指導者のでた和野部落に、「志賀団七」を演目とする和野神楽が伝わってきた例などをあげて、「白石女敵討」が「武士の不当な仕打ちに対する百姓娘の正義の闘争」として読まれ、それが蜂起する百姓への励ましとして受容され、共感されたのではないかという主張をしたのである。これは従来の理解をくつがえす、画期的な見解であつたといえよう。

氏の議論は、「白石女敵討」の理解に一石を投じたことは疑いない。だが、筆者は氏が農民闘争との関係だけに焦点をあて、常に農民的立場に立つてこの物語を理解していることにやや物足りなさを感じるものである。この敵討話には、農・商・女性を含めて近世の庶民の感情を昂らせる内在的な構造があり、彼らはそれを直観的に読み取っていたのではないか、と考えるからである。そこで、あらためてこの話を解説してみることにしよう。

この物語は、百姓親子の田の草取りというごく日常的場面から始まっている。しかし、そこに志賀団七が現れ、父与太郎を殺害したことで、少女の人生は激変してしまう。村の内部で営まれていた百姓姉妹の平凡な日常生活は奪われ、父の殺害―母の死―離村―江戸行―正雪道場での修行―団七との果し合い、といった疾風怒濤の異常体験を重ねていくことになるのである。そして、本望を遂げたあとには平穩な尼生活が待っている。ここに見られるのは、日常から非日常を経て、

再び日常へと回帰する円環構造である。これは「祭りの構造」そのものであるといえよう。

祭り研究に大きな影響を与えているエドモンド・リーチは、祭りを俗（日常）から聖（非日常）への飛躍と捉え、聖のうち役割転倒、仮装などの局面があることを説いている。⁽¹⁰⁾ また同様ターナーは、祝祭的状况で生じる、無礼講的な規範の融解状況をコミュニタスと呼んでその意義を強調する。もし、「白石女敵討」が敵討という異常祭りを描いたものであるとするならば、こうした日常的秩序の転倒や融解がどこかに認められるはずである。

そこで、この点を確かめるために、対立関係にある姉妹と志賀団七との与太郎殺害以前の状況を比べてみることにしよう。

団七 Ⅱ 武士 Ⅰ 男 Ⅰ 二七歳 Ⅰ 屈強

姉妹 Ⅱ 百姓 Ⅰ 女 Ⅰ 一六、一三歳 Ⅰ 柔弱

団七は武士であり、「古今無双不敵之若者」であつた。一方、姉妹はまだ年若い百姓身分の少女である。つまり、ふだん暮らしている世界においては、両者には身分・男女・長幼において決定的な違いがあるのである。百姓に対する武士の優位、女に対する男の優位、年少者に対する年長者の優位を説くのが儒教道徳である。団七は、日常の世界では姉妹に対して圧倒的優位者の立場に立っていたのである。

しかし、由井正雪の助力を得て道場での修行、艱難辛苦の末に、姉妹は力を獲得することができ、結局団七との戦いに勝利したのである。このクライマックスにおいて、この物語は壮大な転倒をもたらすことになる。すなわち、武士に対する百姓の優位、男に対する女の優位、年長者に対する年少者の優位が出現するのである。これは身分・男女・長幼の序の否定を意味するものといわねばならない。そして、読者もよく知る公儀の転覆を図つた大悪人由井正雪が、実は正義の武士であつたという、悪と正義の転倒もそこに組み込まれている。これらは読者の日常の生活においては、ありえない、いやあつてはならない事態である。

この物語が庶民の人気を得たのは、そこにこうした無礼講的な価値転倒の異常世界Ⅱユートピアが出現し、描かれてい

たからではなからうか。彼らは、それを敏感に読み取ったのであろう。封建制社会の身分的抑圧に苦しむ人々にとって、百姓・女・年少者という負性の記号を与えられた側が、武士・男・年長者という正性をもつ側を打倒するのは、胸のすくような快事であつたに違いない。先の「ちよほくれ」にみられるように、あるいは一揆の農民のように、前者に同情をよせ、思い入れをしている人々は、この逆転に溜飲を下げ、喝采をおくつたのである。

さらにつけくわえると、男尊女卑、女性の無能力（自らの判断能力をもたぬ性）、「性による職分固定」を強調する儒教世界に生きる女性にとつて、自らの主体的意思で敵討を願ひ、自らの力量を高めるために日々努力し、男と対峙して戦い、目標を達成する姉妹は、たいへん眩しく凛々しい姿にみえたに違いない。『奥州白石女敵討』は、自力救済という当事者の実力が求められる世界にあつて、堅忍不拔の強い意思をもち、目標のために自らを鍛え戦う女の物語なのであり、これは儒教が本来目標とする女性像とはかなり異なるものではなからうか。

いずれにしろ、「白石話」は、儒教的価値の実現（＝「孝」）を説く物語であるかにみえて、実はそれに重なるかたちで儒教的価値の否定の物語が組み込まれているのであり、むしろ近世庶民の人気は後者にこそあつたといつてよいのではなからうか。近世の実録本は、何よりも庶民の娯楽だったのであり、庶民は理屈ぬきの感動や共感、日常の抑圧や桎梏からの解放をそれに求めていたに違いないからである。悲劇に見舞われたヒロインへの同情、強者の立場にある加害者への憎悪、弱々しい姉妹のスーパー・ヒロインへの変貌、弱者と強者の立場逆転の痛快感、そうした要素が庶民に受け入れられ、この読本の評判を高めていったと考えられるのである。

『奥州白石女敵討』を単純な「孝」の物語として理解することは、それを愛した近世庶民の実像を見誤るといわねばならない。

三 歌舞伎『碁太平記白石噺』

(一) 『碁太平記白石噺』の概要

実録本の人気は、やがて歌舞伎の創作へと波及する。それが『碁太平記白石噺』である。この歌舞伎は、安永九年（一七八〇）正月、もともと江戸の薩摩外記座で人形浄瑠璃として上演され、その三ヶ月後に江戸森田座で歌舞伎化されたものである。その内容は、実録本とはまるで異なる話となっている。しかし、実録本の影響のもとにつくられ、もう一つの「白石話」として庶民の人気のかいものであるから、その人気の意味を探っておく必要はあるであろう。

この歌舞伎は、全一一編からなる長い演目であり、由井正雪事件を主材とし、宮城野信夫の敵討をそこに組み込んだものとなっている。両者の関係からして、『奥州白石女敵討』ではなく、『慶安太平記』を基礎に脚色したのである。脚本は、紀上太郎・烏亭焉馬・容楊黨の三人の合作であるが、容楊黨の担当は第二編のみであり、多くは前二者によつて執筆されたものである。

執筆者のうち紀上太郎は、越後屋南三井家の第四代当主、三井高業である。彼は豪商三井家（分家）の当主として幕府の御為替御用を務めるなど商家経営にあたったが、その一方、大田南畝・円山応挙・平賀源内・烏亭焉馬などの当時の一流文化人とも交流し、また彼らの後援者でもあった。同時に、自らも諸芸に通じ、浄瑠璃作者紀上太郎として、あるいは狂歌作者仙果亭嘉栗として、少なからず作品を残したのである。『碁太平記白石噺』の執筆も、彼の後援によるプロジェクトだったとみられる。¹³⁾

なお、烏亭焉馬は、元大工の棟梁であり、狂歌・歌舞伎脚本・常磐津などの多数の作品や考証を残しているほか、市川團十郎付の作者、落語中興の祖としても有名である。¹⁴⁾ 容楊黨は、町医者松田某の号とされ、歌舞伎『加々見山旧錦絵』の

作者として知られるが、詳細は不明。

『碁太平記白石断』は、何分筋が複雑であり、また太平記の世界を借りた本筋の正雪（歌舞伎では宇治常悦）事件の方は人気をえられなかつたらしく、通狂言であつてももつぱら姉妹の敵討に関わる七段目、もしくはその前後が評判をよんだようである。⁽¹⁵⁾ とくに七段目の「新吉原揚屋の場」（吉原二階之場）の評価はたかく、明治以後になると『碁太平記白石断』の上演は、ほとんどこの「揚屋」の場面に限られるようになってしまふ。⁽¹⁶⁾ そこで、人気の中心であるこの「揚屋の場」をかいつまんで紹介しよう。⁽¹⁷⁾

新吉原大黒屋の傾城宮城野は、奥州の出。年貢未進の父のため自ら吉原に身を沈めて、金を工面したが、今では花魁として吉原遊廓でも全盛を誇っている。その宮城野が二階座敷で店に出る支度をしている際、新造たちが前日主人の惣六が浅草奥山から連れ帰つた田舎者の奉公人を無理やり連れてくる。そして、出身地や江戸に來た理由を尋ねようとする。新造たちは彼女の田舎言葉聞いて笑うが、宮城野にたしなめられて退場する。

後に残つた宮城野は同郷だと聞き、父与茂作の消息を尋ねるが、凶らずもその娘が実の妹だとわかり、姉と名乗りでる。しかし、幼いときよりつらい思いをしてきたおのぶは信用しない。そこで、大切にしてきた守り袋をみせて、両者が同じ守り袋をもっていることを確認しあう。心を開いたおのぶに、宮城野はあらためて江戸へ來た子細を問うが、与茂作が代官志賀台七に殺され、病気の母も心労から亡くなったという悲しい事実を聞かされる。廓勤めの年季があげたら、国元で両親に孝行し、婚約者と暮らすことを夢見て辛い勤めに耐えてきた宮城野は、わが身を愁嘆するが、いつまでもそうしてはいられない。妹とともに亡父の敵を討つため、吉原を抜け出す決心をする。

その時、二人の話を聞いていた大黒屋惣六が現れる。事情を知られた宮城野は妹とともに、惣六に切りかかるが、容易にあしらわれてしまふ。惣六は、『曾我物語』を例えにひいて、時節を待てとはやる姉妹を懇々と説き伏せる。人情を知る彼は、やがて宮城野に彼女の年季証文を与え、二人を廓の外へと出立させてやる。

この場面が評判をよんだのは、宮城野の廓言葉とおのぶの奥州訛りのやりとりの面白さ、父の死を知つた宮城野が悲嘆

にくれるくどきの場面、世なれた惣六の意見事、などの演出にある。しかし、ここでの問題は、姉妹や大黒屋惣六を江戸の町人たちがどう受けとめたかという点にある。

(二) 江戸町人社会と「白石話」

実録本「奥州白石女敵討」は、百姓姉妹の健気な覚悟、正雪道場での禁欲的な修行生活、奥州白石での対決が主要な筋であり、百姓と武士のみの世界であつて、いわば質実剛健な敵討話である。

これにたいして、「碁太平記白石噺」の宮城野信夫は、廓の世界の話として描かれるものである。宮城野は太夫という吉原の最高級の遊女であり、歓楽街のなかの今をときめく大スターである。ちなみに、「揚屋」の語り出しは、「入相の鐘さえ早く暮過ぎて、廓の内は万燈会、歌舞の菩薩の色揃え、わけて全盛宮城野が部屋は上品奥二階、箆箆長持鏡台の、埃取りまで綾錦、袱紗なりける有様なり」となっており、廓の夜の賑わいや華やかさを舞台として、姉妹の物語が進行するのである。

江戸の都市文化の象徴ともいえる賑わいの吉原、大勢の廓の女にかしづかれ、洗練された太夫の宮城野。これらは江戸庶民の憧れであり、羨望でもあつた。ここでは、実録本の質実さはなく、華やかで粋な都市の風俗がある。そのなかにやや異質の敵討話が闖入してくるのである。この都市の洗練のなかに紛れ込むのが、田舎訛りのきつい野暮つたいおのぶ(信夫)である。しかし、彼女の野暮つたさは周りから笑われ、廓の洗練をいやが上にも引き立てる。都市と田舎は対立し、優位するのは都市である。こうした都市の文化や都市生活への肯定は、この歌舞伎作者たちの嗜好であり、芝居をみる江戸の町人たちの嗜好であつたといつてよい。

三井高大は、「白石噺と其作者嘉栗について」という論考⁽¹⁸⁾のなかで、紀上太郎(三井高業)について

「彼が如何に町人社会の描写に努めたかと云うことは、彼の作品の至る所に窺われる。彼の好んで用うる場面は、屢々浅草吉原の江戸町人に親しい場所であり、作中の人物の詞や生活にも、力めて町人生活との接触をはかっている。

彼の智識と考証とは、彼の執筆時に於ける町人らしさを妨げたかも知れないが、彼の生活や感情は町人のそれであり、従つて結局、彼は町人であり、町人としての作者であつた」

と述べている。人氣の七段目は烏亭焉馬の執筆になる部分であるが、焉馬自身吉原に通曉していたことはよく知られているところであり、また筋書きは共同執筆者であり後援者でもあつた紀上太郎の意向が働いていると思われ、こうした町人作者たちの趣向として、先行実録本の人氣をあてこんで、彼ら馴染みの江戸の吉原に「白石話」を取り込んだのであろう。そうした趣向は、姉妹の助力者についても指摘できる。実録本の助力者は、武士の由井正雪である。これに対して歌舞伎では、町人の大黒屋惣六（丸本では大福屋）である。ただし、歌舞伎においても、後段に宇治常悦のところでは剣術修行をする場面がでてくるが、常悦には大黒屋ほどの人氣はない。

この大黒屋にはモデルがあつた。近世後期、十八大通と呼ばれる、みずから大通人と称し豪奢で浪費的な生活をする一方、奇抜な行動で世間の耳目をひいた一群の富商たちがいた。⁽¹⁹⁾その一人に大黒屋庄六（秀民）という吉原の楼主がおり、⁽²⁰⁾彼は烏亭焉馬の狂歌仲間であつたとされている。彼らはおそらく廓での遊び仲間であり、焉馬が知己の名を芝居に取り入れて楽屋落ち的な遊びをしたわけであるが、十八大通の名は江戸庶民もよく知つていたのであろうから、そうした観客たちへの受け狙いでもあつたのであろう。観客にとつては、周知の大黒屋という、彼らと同じ江戸町民が活躍するのであり、そこに思い入れと共感を感じたに違いない。

芝居での大黒屋は、さまざまな場面で姉妹を助けている。年貢が払えぬ父を救うため身を売つた宮城野をひきとつただけではなく、六段目では姉をたずねて江戸にでてきたおのぶが女術の観九郎にあやうくかどわかされるのを救つてやる。そして、敵討へとはやる姉妹への懇々とした異見。江戸町人の大黒屋は、情に厚く義侠にとんだ人物として描かれている。このような人物が姉妹の助力者として登場すること、ここに歌舞伎の「白石話」が江戸の町人からよろこばれたもう一つの理由があろう。

だが、こうした江戸の町人をよろこばせる趣向だけが「碁太平記白石噺」ではない。宮城野は、歌舞遊宴のなかに過

し全盛をきわめていたとはいえず、しよせん苦界に沈む身であることに変わりはない。宮城野は次のように嘆き悲しんでいる。

「コレ、この姉を見や。年貢に迫つて父さんは水牢、その苦しみが助けたいばかりで、この廓へ身を売つたを、思い返せば十二年、そなたは五つ顔さえ見知らず、父さま母さまの死目にも逢わぬという、悲しい不幸な果敢ない事があろうかいなア」

実録本の「白石話」は、親を殺された少女の不幸にすぎない。これに対して、歌舞伎の「白石話」では、親を助けるための少女の身売り、肉親との離別、廓でのつらい勤め、両親の悲報、妹の孤独と、女の不幸が積み重なっている。姉妹の悲しみは深く、宮城野はその悲しさをたおやかにくどく。観客は、その言葉を聞きながら、姉妹の身の上に同情をよせるのである。

歌舞伎の人氣場面に復讐の快哉はない。親の敵を討つために、姉妹は一刻も早く廓をでていこうとしているのであるから、「孝」を一つのモチーフとしているとはいえるであろう。しかしながら、人氣の七段目は、「孝」の物語よりも、姉妹再会の悲喜劇、廓に生きる女性の哀しみと江戸町人の俠氣こそが前面にでた話なのである。江戸の庶民にとつての「白石話」とは、彼らが憧れる高級遊女の、だが実は不幸なその境遇に同情することであり、江戸の町人がかわいそうな姉妹を救つてやる、その義侠に拍手する。そのようなものとしてこの話が歓迎されたのである。その意味で、歌舞伎の「白石話」は、あくまで町人による町人のための「白石話」だったのである。

以上見てきたように、近世の「白石話」は、もっぱら読本や歌舞伎などの大衆娯楽のなかに存在していたのであり、「孝」の意識もあるにはあるが、それ以上に、庶民の抑圧からの解放感、そして人間的共感や感動の対象として存在してきたのである。

四 宮城野信夫顕彰運動

(一) 白石の孝子堂建設運動

近代に入っても「白石話」の人氣はつづいた。実録本は相変わらず読まれたし、歌舞伎の上演も途切れることはなかった。こうした中で、歌舞伎の劇評や「白石話」の虚実について論じた小論考なども現れるが、物語の意味について記すものはあまりない。大井劇癡が大正三年「孝の徳（宮城野、しのぶの事）」と題して、『平日閑話』の書状にみられる結末（姉妹は本懐ののち伊達安芸や大町備前に貫われ、世を安樂に送った）を、「これも偏に孝の徳」と述べているのが目につく程度である。⁽²¹⁾

ところが、大正八年（一九一九）から昭和一四年（一九三九）にかけて、実録本の敵討の舞台となつている白石地方において、大がかりな宮城野信夫の顕彰運動が進められてゆく。⁽²²⁾運動自体は、素朴な郷土愛的な動機に始まるものであるが、このなかで宮城野信夫の姉妹は、「孝子の鑑」「日本婦道の亀鑑」として位置づけられ、「忠孝道德」の偶像にのぼりつめていくのである。その経緯をまずかんたんに記しておこう。

白石地方には、「白石話」に関わるいくつかの伝承があつた。父与太郎が殺された場所と伝えられる「八枚田」、与太郎が団七に膝を折つて詫びた場所という近くの「膝折橋」、与太郎の墓とされる場所などである。こうした伝承は、地元の人にとっては「郷土の英雄」に関わる重要な史跡であり、このため大正八年（一九一九）この「八枚田」周辺の住人より、そこに新たな施設をつくり、「孝子」宮城野信夫の慰霊をしたい、という動きがでてくるのである。⁽²³⁾

一方、白石周辺にはそうした史跡に関心をもつ熱心な郷土史家や歴史愛好家があった。東北地方では、「白石女敵討」の話はよく知られており、前記のような伝承もあつたことから、宮城野信夫の敵討の史実性を疑う者はおらず、その「史

実」を補強するための史料収集や遺跡探しが行われていたのである。

この二つの動きの結節点にいたのが、白石にある専念寺の住職徳力智海師であった。師は、それまで独自に静岡の由井正雪や宮城野信夫の関係遺跡について情報を集めており、また「八枚田」周辺の人々から慰霊の相談をうけたこともあり、これ以後「八枚田」に顕彰施設をつくる運動の中心として活躍することになる。彼はまず県会議長亘理晋、刈田郡長北島保治などの数人の有力者を賛同人に加え、県知事へも顕彰施設の建設について上申を行った。

その後大正九年一〇月、「熱心なる忠孝主義の鼓吹者」であった森正隆県知事が、白石公会堂で講演を行う機会があった。かねて陳情をうけており、また知事自身「宮城県民の精神指導の根本思想として涌谷の伊達安芸公の忠、宮城野信夫の孝を以てしたいと思ふ」と考えていたこともあって、その席で両孝女の表彰は当然ではないかとして、その場にいた人々に賛否を問うたのである。満堂拍手で賛意を表し、ここに知事の発案になる姉妹の「銅像建設運動」が開始されたのである。⁽²⁵⁾

「銅像建設趣意書」⁽²⁶⁾は、次のようにいう。

「嗚呼夫の僻陬寒村の貧家に生まれたる可憐の少女、父は兇刃に殞れ、母は亦た尋で悲嘆に歿し、一朝にして怙恃を喪う。真に一介依る無きの身を以て、百難を排し萬古に耐へ、辛酸流離幾星霜、終に克く不俱戴天の仇を報じ、孝道の大義を全ふす。千歳の下、猶ほ凜として懦夫を起たしむ。爾來幾百年、其の世道風教に資せる者、豈に鮮少なりとせんや」

ここに至って宮城野信夫姉妹は、「孝道の大義」に生きた聖人となり、「世道風教に資せる」偶像となつてしまったのである。しかし、その一方でここには姉妹の悲劇や辛酸に対する「故郷」の人々の優しさや同情も認められるのであり、こうした思いをうけて、「孝子在天の霊を弔ひ」、そして「永く世人の表式たらしめん」ための「孝子至誠の遺趾」の建設が始まるのである。

ところが、ほどなくこの銅像建設運動は挫折してしまふ。当初の目論見としては、東京市村座で「碁太平記白石斬」を

上演してもらい、その入場料の一部を建設資金に回してもらえないかと交渉していたのであるが、姉妹役を予定していた俳優が二人とも突然死亡する。そこでこの話を歌舞伎座にもちこんだところ、歌舞伎座も火災で焼失。さらに、まもなく関東大震災という大災害もおこり、全国的な資金集めは頓挫することになったのである。⁽²⁷⁾

このため銅像建設をあきらめ、募金活動の規模を縮小して、大正一四年白石周辺の人々の零細な寄付による堂宇の建設が目指されることになった。それが今も同地に建つ「孝子堂」である。この方針転換後の「孝子堂建設運動」は、地元の大鷹沢小学校長の石崎亀治、徳力智海師等が中心になって進められたが、地元民による土地の提供、地元青年団による建設作業など、そこに多くの人々の協力があつた。

「孝子堂」には、まもなく正雪・宮城野信夫ゆかりの静岡市来迎院より仏像がもらい受けられ、安置される。これは宮城野信夫の守本尊とされている八臂弁財天であり、大正一五年四月に盛大な入仏式が催された。以後この「孝子堂」では、毎年賑々しい姉妹慰霊の祭典が続けられていくのである。

これらの運動は、孝子慰霊、孝子顕彰の目的をもって進められたものであり、「忠孝主義者」の知事の思惑とも絡んで、宮城野信夫を「孝子」として偶像化するものであつた。

しかし、白石周辺の人々にとって孝子の顕彰は、姉妹への同情・共感と郷土に対する愛着の表れだったのであり、その「孝」も「郷土の英雄」の物語に思いを馳せる、比較的温和な「孝」であつたとみるべきであろう。

だが、この運動はさらなる展開をみせるのである。

(二) 宮城野信夫三百年祭の執行

実録本『奥州白石女敵討』の敵討実行の年は寛永一三年（一六三六）であるが、『慶安太平記』の方は寛永一七年（一六四〇）となっており、この年より三百年経つたとして、昭和一四年（一九三九）に白石地方において「宮城野信夫三百年祭」が大々的に挙行されるのである。

そこでは、宮城県知事を総裁とする「宮城野信夫三百年奉讃会」が組織され、郷土史家による宮城野信夫の敵討に関するラジオ放送、白石専念寺での関係史料展覧会、大規模な慰霊式など、さまざまな行事が計画された。この間には、歌舞伎の『碁太平記白石斬』と縁の深い東京吉原貸座敷業組合、および東北六県の貸座敷業組合の代表百名が招かれ、そのほか土井晩翠・徳富蘇峰など有名人も請われて史跡創出に関わりをもった。⁽²⁸⁾

三百年祭の執行は、白石地方の誇りと名誉をかけて行われたが、そこには世に宮城野信夫の事績を知らしめ、またその一方で観光にも役立てようという気持もあった。しかしながら、前年に国家総動員法が成立し、戦時体制のなかでは、三百年祭もその影響をまぬがれず、宮城野信夫の慰霊は、そうした素朴な意図をはるかに超えて、「日本精神の昂揚」と「孝道の発揚」の手段と化し、「建国の大理想」たる「東亜新秩序建設」に資するものであらねばならなかったのである。

「孝子宮城野信夫三百年祭趣意書」はいう。

「本年は三百年に相当れり。因りて資を大方の諸賢に募り、蔽に祭祀を執り行ひ、孝子の霊を慰めんとす。時恰も未曾有の非常時局に際会し、愈々国民精神の昂揚を要するの秋、両女至孝の誠を弥々称揚し、社会教化に資すると共に、建国の大理想たる東亜に於ける新秩序建設の大業に裨補せんとす。冀くは、不肖等の微忱を諒し、此の拳を賛助せられんことを」

こうして始まった三百年祭であったが、そこに関わった人々は、誰もが宮城野信夫の行為とその「孝」を讃え、称揚した。だが、そこには人によって多少のニュアンスの違いも認められる。いくつか代表的な発言を紹介しておこう。

「郷の生める宮城野信夫薫しき 孝女の誉千代に朽ちせず」⁽²⁹⁾

これは三百年祭に際して歌碑をつくるため、それに刻む歌を何かと請われた土井晩翠が、地元によせた歌であり、今も「八枚田」にある石碑に刻まれるものである。彼は宮城野信夫を郷土の誇りとし、その榮譽を讃え、その「孝」をひたすら称賛する。姉妹の「孝」を讃え、姉妹の行為を詠嘆する者は多い。

「親をおもふひとふしよりぞなよ竹の を、しきかげもさしそへにける」(小倉博)

「をとめごが親に心をつくし琴　いまぞあはれと人のきくらん」(菅野圓蔵)

「しろいしのはなしにさきしおみなへし　年なふれども世にぞにほへる」(佐久間文蔵)

「はらからの親につくせしまごころは　さくらのはなと世にぞにほひる」(佐久間貞子)

また、仙台の郷土史研究者であった小倉博は、「白石女敵討」の有名になった理由として、女の敵討であったこと、百姓の娘がしたことの珍しさを挙げ、これに加えて、

「姉妹が親を思ふ孝心から協力一致したといふ、姉妹の間の美しい情愛が見えるからでもある」
と、「孝」と「姉妹愛」の結びつきを指摘している⁽³⁰⁾。

ここに示したいくつかの例は、親を思う宮城野信夫への人間的共感や詠嘆、郷土愛に結びついている点で、前述の温和な「孝」に連なるものといえよう。

だが、この運動の「孝」は、それにとどまるものではなかった。地元白石中学校の校長であった、星教育が新聞によせた発言をみてみよう。彼は、宮城野信夫を「日本婦人の鑑」といい、

「義士はこれ忠を全うし、宮城野信夫はこれ孝道を全うし、西に義士あり東に宮城野信夫あり、両者等しく百世の下人をして感奮興起せしむる、優劣なき両亀鑑なり」

として、赤穂義士に比肩させて姉妹を讃えている。彼にとつての宮城野信夫は、より教訓性を帯びた存在であり、「孝道」「婦道」の手本なのである。むろん「孝道の大義」に生きる宮城野信夫像は、大正期からつづくものである。しかし、この時代の「孝道」や「婦道」は、抽象的な倫理的目標ではなく、もう少し現実的で具体的な国策とつながっているのである。

同じ新聞紙面にある、傑山寺住職麻生寛道師の発言を聞いてみよう。

「天晴れ女の可弱き身を以て姉妹協力、無道の武士に報復の本懐を遂げられた事実を考へ至るときに誰か感激なくして、涙なくして此の孝女の雄々しき其の姿を想起せざるものがあるか」

「孝子の芳魂欣然蘇り来らん。今や非常時日本の時局益々多端なるとき、忠孝一如の大道を顕現して我が国体の精華を發揮し、女性の威力を銃後奉公に待つや切なり」

彼は、姉妹の凛々しき、「雄々しき」に感激し、その感激に酔いつつ、「忠孝一如」を媒介として、戦争遂行の協力者へと女性を駆りたてる。「孝道の大義」に生きる女性、「婦道の鑑」とは、戦争という国策に従順に協力し、「銃後奉公」に勇み励む女性の理想像である。

これは、決して麻生師個人の思いではなく、前記「三百年祭趣意書」にもあるように、祭りの公的な位置づけなのである。「不忘新聞」の「社説」⁽³³⁾も、次のように述べている。

「勿論、この三百年祭に当たっては特に盛大なる追悼祭を挙行し、併せて国民精神総動員時代に忠孝の大道を宣揚し、国民教化運動の一端たらしめようと計画したのは宜べなりと言ふべきである」

「本計画は時代に順応する一大国民精神運動の一翼として、地方民衆を刺激すること多大なりと信ずるもので、本計画の一日も早く緒につかんことを希ふ所以である」

宮城野信夫三百年祭は、基層に不幸な宮城野信夫への共感からくる素朴な「孝」の讚美があり、その上に「孝」道德の模範としての姉妹の偶像化が進められ、さらに戦時体制を背景としてその模範たる宮城野信夫に続けという戦争への煽動があったのである。かくして三百年祭のなかの宮城野信夫は、「日本婦道の亀鑑」として、あるいは「忠孝一致日本精神の精髓」として、理想化されたのである。それは民衆の素朴な共感から生まれた「孝」が、国家への盲目的な追従としての「忠孝の大道」にすりかえられていく現場の姿であったといえよう。

かつて強者を倒す弱者の代表として、庶民の身近なアイドルであり、喝采の対象であった宮城野信夫は、いまや儒教道德の神聖な偶像と化し、婦道の鑑となり、国策協力者として戦争遂行の先頭に立ったのである。

こうした宮城野信夫の変貌は、慰霊祭の儀式からも窺うことができる。⁽³⁴⁾

三百年祭の慰霊式は、昭和一四年五月六日と七日の両日、孝子堂で行われている。六日には「宮城野信夫一族祖先の大

供養」(「千燈供養」)があり、七日午前には「八枚田修祓の儀」「御堂供饒の儀」が、その後には式典として「記念碑除幕」「読経」「与太郎の法名披露」「焼香」などが行われた。七日午後になると「白石和讃」(白石和讃講)・「奉納薙刀試合」(白石高等女学校)・「奉納武道試合」(刈田郡青年団および白石中学校)・「奉納演劇『白石嘶』」などの芸能や武道も披露されている。

このような儀式のうち、七日午前の式典の最初に行われたのは、「皇居遙拝」と「皇軍武運長久祈願」の「黙禱」であった。姉妹の「孝」は「忠孝一如」で天皇制に、その凛々しさや勇ましさは「皇軍武運長久」とむすびつけられていたのである。女学生による薙刀試合や、青年団・中学生による武道試合も、敵討からの連想が働いたことは疑いないが、やはり同時に戦時体制下で国策への協力が意図されていたのであろう。

この運動の中心で諸事業を計画した「宮城野信夫三百年奉讃会」は、総裁に宮城県知事菊山嘉男をおき、副総裁に男爵片倉健吉、会長・副会長に白石町長と大鷹沢村長をおく、大きな組織であった。そのなかには、地方首長や議員にまじって「仙台郷土研究会」という郷土史研究会の代表、多くの小中学校長が顧問・委員に名を連ねていた。また協賛として「宮城県教育会」、顧問に「刈田郡教育会」、「愛国婦人会」、「国防婦人会」などの参加もあった。こうした行政・地方史家・教育界・国策団体のそれぞれの期待のなから、時代にふさわしい新たな宮城野信夫像がつくり出され、こうした姉妹像がこの時期教育や活字媒体を通して地域のなかに広がっていったのである。

五 おわりに

以上みてきたように、庶民の捉える宮城野信夫像には大きな変化があったのである。その変化とは、「白石話」を「孝」の物語とし、宮城野信夫を「孝子の鑑」とする見方は、実は近代になってからひとときわ声高に主張されたものであり、強調されたものだとということである。

近世の実録本のなかの宮城野信夫は、確かに理不尽に殺された親の無念を、加害者への報讐によって晴らさんとする「孝」を体現する存在であった。だが、近世の庶民にとって受容された宮城野信夫は、決してそれだけの存在ではなかった。彼女たちは、庶民の同情や共感の対象であり、封建的抑圧にのち苦しむ弱者の代表として、強者に反撃を加えるスーパー・ヒロインであり、儒教的価値の否定者でもあったのである。

歌舞伎の人気場面では、「孝」はいっそう影が薄い。主題は敵討そのものよりも、廓の女の不幸であり、江戸町人の義侠である。歌舞伎の「白石話」では、「復讐の快哉」や武張ったところに人気はなく、廓の人間模様こそが好まれているのである。

このように、近世の「白石話」は単純な「孝」の物語とはいいがたく、宮城野信夫も、「孝子」という以上に、身分・男尊女卑など庶民にとつての抑圧からの解放を自分に変わって叶えてくれる夢であり、またその哀れな境遇に涙し、共感する、ごくごく庶民に近い存在だったのである。

このような庶民の思いと共存する、実録本のなかの「孝」とは何なのであろうか。こうした「孝」は、領主の民衆教化の圧力や影響によって、庶民のなかに浸透した封建倫理なのであろうか。そうともいえる。しかし、実録本は、娯楽性をこそ第一義としており、そのために荒唐無稽な世界を描くものである。主たる目的は、庶民への娯楽の提供にあり、他はそれに従属するものといつてよい。したがって、そこに描かれた「孝」は、話を面白くするための小道具にすぎなかったともいえよう。実録本の敵討話とは、儒教をだしにして遊ぶエンターテイメントなのであり、読まれ方を強いられるものではなく、それぞれがその面白さを堪能し、消費すればよいものだったのである。

江戸後期の「大衆社会」状況においては、儒教は多分に娯楽のなかで庶民に遊ばれ消費される存在になっていたのである。そういう状況が多く敵討話を生み出して、世間に流通したのではなかったか。「白石話」も、そんな大衆娯楽のなかに生まれた物語の一つだったと思われるのである。

だが、近代にはいると、姉妹像は大きく変貌する。「白石話」は、強者に対する弱者の反撃の物語などという見方はな

くなり、それは、つねに「孝」の物語として、それも遊び心のない真摯な「孝」の話として理解されたのである。大正から昭和戦前期にかけての、宮城野信夫は、同情すべき「可憐の少女」であり、白石地方の誇りであり、「孝道の大義」に生きる「孝子の鑑」であり、「婦道の鑑」であり、そして「銃後奉公」に励む女性の理想像でもあったのである。

地域の誇りとして、悲しい境遇への同情・共感とむすびついた温和な「孝」にとどまる限りでは、とくに問題はなかったであろうが、それが政治に結びつき、儒教道德の偶像Ⅱ「孝子の鑑」と化し、戦争という国策に協力する女性の模範となっていくところに、近代における宮城野信夫の悲劇性があつたといえよう。

そろそろ宮城野信夫に負わせられた、「孝子の鑑」という重荷をおろしてやり、彼女らのごく近くにいた庶民との交流の姿（宮城野信夫に投影された庶民の思いや夢）を明らかにすることが必要なのではないだろうか。

注

- (1) 『国史大辞典』「かたきうち」の項目所収「敵討一覧」、平出鏗二郎『敵討』所収「江戸時代敵討蹟表」などによる。
- (2) 吉原健一郎「史が語る仇討ち」『歴史読本』一九九七・一月号も、庶民の敵討の増加について、「封建的倫理の教化の問題」と「庶民エネルギー活性化の問題」を挙げ、本稿と同様の理解を示している。同書一九九頁。
- (3) 本稿が、「奥州白石女敵討」「白石女敵討」「白石話」などと表記するのは、敵討話の内容であり、『奥州白石女敵討』などの表記は、そのような内容を記す作品（著作物）を指すものである。
- (4) 牧田勲「近世女性と敵討」『歴史と民族における結婚と家族』江守五夫先生古稀記念論文集（二〇〇〇）。この敵討に関する研究史は、同論文と茶谷十六「奥州白石断」の成立と展開」『東北民衆の闘いと文化』民族芸術研究所紀要第二号（一九七五）を参照されたい。
- (5) 『奥州白石女敵討』については、現在も古書店に写本が出回っており、筆者もそこから購入した寛政年間の写本を参照した。『慶安太平記』は、『近世実録全書』第一二巻（早稲田大学出版部 一九一八）に所載されている。なお、話の概要は「宮城野信夫姉妹仇討」「宮城県の伝説」（富田廣重 一九七九）など、諸書に紹介されている。

(6) 白石和讀は、徳力智海「みろく寺物語」『白石郷土研究会会報』第一号(一九七四)一二〜一三頁に紹介されている。徳力「孝子堂由来記」(一九三三)の再録。

(7) 「ちよほくれ白石敵討」同右書 一三〜一四頁。専念寺蔵の版木の紹介。

(8) 一例をあげるならば、小倉博は「白石女敵討はこの至情(君父を思う至情―筆者注)の最も著しい顛れで既に久しく世人を感動させて来たが、今後も万世に亘って烈々と輝くであろう」と述べる。同氏「白石女敵討」『仙台郷土研究』第九巻第五号(一九三九)。「白石女敵討」を「孝」の物語とする言説については、本稿後段で詳しく紹介する。

(9) 前注(4)茶谷論文

(10) リーチ・青木保訳「時間とつけ鼻」『未開と文明』現代人の思想一五(一九六九)所収。三二五〜三三二頁。

(11) ターナー『儀礼の過程』富倉光雄訳(一九七六)

(12) 例えば、貝原益軒の『教女子法』は、「男は外をおさめ、女は内をおさむ」とあり、後者こそ「婦人の職分」であるとして、職分の固定を説いている。また、「凡そ婦人は、柔和にして、人にしたがふを道とす」といい、「いとけなきより、身をおはるまで、わがままに事を行こなふべからず。必人にしたがひてなすべし」と従属的な生き方をよしとし、自らの判断にもとづく主体的な生き方を否定する。さらに、「女子は男子にくらぶるに、智すくなくして、目の前なる、しかるべき理をもしらず。又、人のそしるべき事をわきまへず。……かくおろかなるゆへ、年すでに長じて後は、よき道を以、をしえ、さとらしめがたし」と、女子の無能性や男尊女卑が説かれている。(貝原益軒『養生訓・和俗童子訓』岩波文庫による)

(13) 『碁太平記白石噺』と紀上太郎に関しては、森修「江戸浄瑠璃と紀上太郎」、三井高大「白石噺と其作者嘉栗」、ともに『嘉栗研究』三井高陽編(一九五五)、大井劇癡「孝の徳(宮城野、しのぶの事)」『演芸画報』大正三年八月号(一九一四)、三井高陽『越後屋反故控』(一九八二)所載の「狂歌師嘉栗」七四〜九二頁などを参照した。

(14) 烏亭焉馬の業績については、延広真治「烏亭焉馬年譜一」『独協大学教養諸学研究』三号、「同二」『名古屋大学教養部紀要』一四輯、「同三」『同紀要』一八輯、「天明・寛政期の烏亭焉馬」『井浦芳信博士華甲記念論文集 芸能と文学』などに詳しい。『碁太平記白石噺』に関しては、「年譜三」の安永九年のところ(二六一頁以下)に論及がある。

(15) 『義太夫執心録』には、「紋太夫、其の後中の芝居で、白石の五ツ目と七ツめヲ、ホ、でどつと嬉しがらせ、サハリから惣六の意見迄近来稀成大評判、其時隣芝居は大物揃ひ、住筆氏内匠と下り伊太夫なれども、紋太にひしぎ付けられて、春より五月節句迄名題看板が五度替りしと云」とある。

(16) 歌舞伎『碁太平記白石噺』の上演史については、国立劇場芸能調査室編『碁太平記白石噺・新古演劇十種の内身替座禅・次郎吉懺悔』上演資料集三五八(一九九五)所載『碁太平記白石噺』上演年表』参照。

(17) ここでは、『名作歌舞伎全集』第七巻所収の『碁太平記白石噺』を利用した。

(18) 三井高大「白石噺と其作者について」『嘉粟研究』三井高陽編(一九五五)三八頁

(19) 十八大通の奇行については、さしあたり『続燕石十種』第二巻所収「十八大通」を一覧されたい。

(20) 大黒屋庄六、および彼と烏亭焉馬との関係については、三田村篤魚『三田村篤魚全集』第十巻所収「江戸芸者の研究」中の「大黒屋庄六の見番」二九八〜三〇〇頁、延広真治「烏亭焉馬年譜三」『名古屋大学教養部紀要』一八輯 一六七〜一六八頁、同「奥州ことばの背景」『上演資料 第一九二回 三月歌舞伎公演 国立劇場』など参照。大黒屋庄六は、芸者見番を始めた吉原の実力者であり、中村仲蔵『秀鶴日記』によれば、「庄六は今吉原にて頭分、作者烏亭焉馬は、其の下知にて浄瑠璃に取組み」とあり、焉馬がその名を芝居に取り入れるについては、庄六本人の要求があったようである。

(21) 前掲注(13)参照

(22) この運動については、『白石市史』三の(2)「孝子堂物語」の解説(二九一頁)にもかんとんに触れられているが、もう少し詳しいものとしては、運動の中心で活躍した徳力智海本人の『孝子堂由来記』(一九三三)がある。現物は筆者も未見であるが、『白石郷土研究会会報』第一一号(一九七四)に「みろく寺物語」として再録されており、その後宮城野・信夫三百年祭実行委員会により『実説白石噺 並に孝子堂由来記』(一九九一)として小冊子に復刻されている。以下、本稿の記述の基本線もこの復刻版『孝子堂物語』によっている。しかし、ところどころ新史料を用いていることをこゝとわっておく。

(23) 徳力智海「経過報告」(専念寺史料)

(24) 昭和一四年五月七日『不忘新聞』「けふの祭典につけ感慨無量です 孝子堂建立者岡政翁談」記事。岡政翁とは、徳力

智海師とともに運動の中心となった岡崎政治郎のことをさす。

(25) 前掲注(23)、(24)同史料

(26) 『孝子堂由来記』所収

(27) 前掲注(23)、(24)同史料

(28) 「孝子宮城野信夫三百年祭趣意書」(専念寺史料)、昭和一四年三月三日『不忘新聞』「宮城野信夫三百年祭り 愈よ本格的具體化へ 菊山知事卒先総裁受諾 近く奉讃会の組織を見ん」記事

(29) 前掲注(24)「宮城野信夫奉讃の歌」記事。なお、同じ歌が『仙台郷土研究』第九卷第五号六頁に、新聞記事と同題で掲載されている。以下の歌はすべて同記事。

(30) 前掲注(24)「有名になったのは浄瑠璃や義太夫だ 小倉博氏談」記事

(31) 前掲注(24)「西に赤穂義士あり 東に宮城野信夫あり 星教育」記事

(32) 前掲注(24)「忠孝一如を顕現し 孝女の芳魂蘇へる 麻生寛道師」記事

(33) 前掲注(24)「社説」

(34) 「孝子宮城野信夫三百年祭趣意書」

(摂南大学 日本法史・民俗学)